

私のシベリア抑留生活

愛知県 水野景典

私が軍隊を志願し、満州の九一八部隊に配属されたのは昭和二十（一九四五）年三月でした。名古屋の名古屋高等理工学校（現在の名城大学）に通っていた私は十九歳。満州に配属されて六カ月後には終戦を迎えることになったのです。

ソ連軍の「捕虜」になったのは義勇心からでした。奉天（瀋陽）の民家で略奪が横行していると知った私たち若者数人は、民家を守るため部隊を抜け出しました。私たちがソ連軍に強襲されたのは、翌年の昭和二十一年一月二十一日。「拳銃を持った日本人がいる」、そう通報されたのです。

収監された第二監獄はまさに独房でした。便所も桶が一個置いてあるだけ。その第二監獄からシベリアのチタ収容所に送られたのは二カ月後でした。まくら木で囲まれた貨車の荷台に押し込まれ、

約二週間かけて移送されました。普段は三、四日で着くのですが、事あるごとに貨車が止まりながらですから時間がかかったのです。

チタの収容所では十畳程の部屋に十五人程が押し込まれました。食事は一日二回。バケツに入ったスープを回して飲むだけ。そんな生活が二カ月ほど続いた後、カラカンドの二〇ラーゲリへ。ここは土塀で囲まれた部屋に二段ベッドがずらり。チタよりよかったです。ベッドをめくると南京虫がウヨウヨいました。

二〇ラーゲリにいたのは半年ぐらい。次に移されたのが一四ラーゲリでした。ここの作業は石山採掘。ノルマができないと地下の営倉行きが待っていました。きついノルマですから誰もできない。交代でお仕置きを受けているようなものでした。営倉は零下三〇度以下。眠ったら死ぬ。だから、みんなで肩を組みながら起きているしかなかったのです。

食事は朝がスープとタバコ箱ぐらいの黒パン一

切れ。昼は現場でおかゆとスープ、それにパンが出ました。ソ連でおかゆが出ることは不思議でしたが、「捕虜」の祖国の食事を出すことは国際法に決められているからと誰かが言っていました。毎日の作業はきつく、病気になるたら休ませてくれるので、中には自分のひざに故意に石を落とす者や、あれこれ工夫して熱を出す者もいた。三七度五分の熱があれば休ませてくれたからです。

一年半ほどで二〇ラーゲリに戻されました。ここの作業は建築。レンガを一個一個敷いていく作業ですが、次を置くときは前のレンガはもう凍り付いていました。作業の合間には共産主義の講習があり、やらないと日本には帰さないと言われた。ただ、この講習を受けるときは作業を免除されるので、進んで受ける者もいました。

私が復員したのは昭和二十四年十月です。実に二十一年から四年弱の抑留生活。まさに、私の兵隊経験はシベリアに抑留されに行ったようなものでした。その間には、何人もの仲間が亡くなりま

した。結核に侵された仲間の内臓が取り出され、おがくずを詰められて草原地帯に埋葬されたあの悲しい思い。

昭和二十四年十月二十五日、ナホトカから高砂丸に乗って舞鶴港に着いたときのあの感動。「生きて帰れた」感激は、我々シベリア抑留を体験した者しかわからない共通した思いでありましょう。そして、不可侵条約を交わしていたはずのソ連が、広島、長崎に原爆が投下されたたん、ひるがえって満州を襲ってきたあの悔しい思いはいまだに忘れることができません。旧ソ連は、数十万人の日本人を拿捕・抑留させ、強制労働を強いたのである。